慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	経済時事評論
Sub Title	
Author	安川, 貞三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1919
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.13, No.2 (1919. 2) ,p.263(115)- 274(126)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19190201-0115

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

全國に於ける物價の平均を以て物價指數を計算せば、此弊害を除去するを得可しと思惟する者あるやも測り難けれど、全國に亘る幾千幾萬の都市町村の物價をば毎月調査計算するは不可能なれば、全國と云ふ雖も、四五の大都會の平均を求め得るに過ぎざれば、此等大都會以外の地方に於ける取引者にしては上述の弊害は尙ほ依然として存在するならんと思はる。加之、此等の幸福なる四五大都會に對しても、平均は結局綜合的に公平なる結果を與ふるに過ぎずして、個々の都會に於ける債權者及債務者の一部は物價平準の人爲的調節に依りて却つて著しき損失を蒙ることなしと云い難い。

次に、一歩を讓つて物價指數を完全に計出するを得るとしても、其物價指數に編入計上せらるゝ貨物は必ずしも債權者及び債務者が全部常に多量に賣買するものでなきが爲めに、物價平準の人爲的調節は却つて一部の人に不測の損失を蒙らしむるの結果を齎すこと絕無なる可しと斷言するを得ない。

最後に、縱令物價の人爲的調節は全完に、且つ總ての人に對して公平に之を行ふこと不可能ならずとするも、物價の人爲的調節は果して結局人類を裨益するものであらうか。動植物中には一年を通じて一定せる温和なる氣温中に之を飼養又は培養せば、著しき繁殖力を示すものが尠くない。されど。人類は之に反して氣候が一ヶ年中に兩三回宛稍々著しく變動する温帶地方に於て肉體的且つ精心的に最も發達するも、氣候が比較的一定せる熱帶及び寒帶地方に於ては其發達頗る遲々たるものがあるではないか。惟ふに、環境の變化は人類に對して一時的に苦痛を與ふるものなるが、其苦痛は轉て人間の活動を刺戟し、結局其の肉體的及び精神上の發達を誘致するものである。若し果して然らば、物價の變動も亦人間の經濟的知識を增進し、且つ經濟的活動を釀生するものではあるまいか。從つて、物價の人爲的調節は故らに人類の物質的幸福の自然的增進を阻害するの傾向を呈しはしまいか。勿論、物質的環境の變化は可なりと云ふも、急激なる變化は人類の發達を害するのみならず、其の滅亡を來たすことあると同じく、物質の暴騰若しくは其暴落は却つて一國の經濟界のみならず政治を攪亂するの虞れあれば、物價の急激なる變動は之を豫防し或は人爲的に緩和す可きである。然しながら、其の範圍内に於ては自由放任を可とするのではあるまいか。

要するに、フイシヤー氏の物價調節策は實行し得るものであり、又實施すれば、少なからざる效果を齎す可きことに就きては疑を容るゝ餘地がないが、物價は之を人爲的に調節す可きか否やが問題であると思ふ。然しながら、我國に於ても物價調節問題が盛んに論議されつゝある際なる故に、フ氏案の大要を紹介し、且つ之に對して聊か妄評を加へた次第である。

經濟時事評論

安川貞三

現實暴露の悲哀

歐洲大戰亂が我國をして一躍成金國たらしめたことは何人も拒むことの出來ない所であらう。見よ輸出貿易は大正二年の六億が同七年に十八億となり、正貨の保有高は四億から十五億に上つてゐる。其他郵便貯金、銀行預金、手形交換高、將た又企業資本にしろ苟も經濟界の推移

を示す可き數字にして其間に數倍の增進を示さないものは殆んどないと云つてよいのである。而してかゝる富の增加は單に一國として見たる場合に止まらず之を國民大多數に就て見るも各個人の財產及び所得は戰前に比し著るしく其額增加してゐることは吾人の信じて疑はさる所である。斯の如く從來世人の見做して以て富となしたる各種の數字が甚だしく其高を增加し一見國民をして著るしく富裕ならしめたるの觀あるにも拘はらず、何事ぞ我國には今や食糧品の缺乏甚だしきを訴へて中流以下に苦色がある。米價問題は將に開かれんとする議政壇上の大問題たらんとしてゐるのである。然れども斯くの如きは是れ何等の奇現象なりとなすに足らない。此を奇現象なりと感するは是れ世人が動々もすれば金の經濟、價値の經濟を力說して物の經濟を度外視するマーカンチリスチックの思想の致す所たらすんばあらず。如何に發達せる營利經濟の今日なればとて社會經濟の立場より見れば經濟の根抵が常に物の上に存することは自給經濟の昔と毫も異なる所はないのである。蓋し吾人が豐裕なりとなすは是れ吾人か取つて以て享樂の用に供し得る物質あるが故であつて、千萬の所謂世人の富ありとなすも其富によりて支配せらる可き物なからんか何等吾人の幸福を增進する所以のものでないからである。如何に巨萬の金や價値あればとて吾人は之を食ふことも出來なければ亦着るとも出來ないのである。故に價値ありて物なき社會は猶富を擁して果しなき大洋を漂浪する捨小舟の船客に外ならない。かゝる者にとりては千萬の富も一塊の握り飯に如かないのである。我國が歐洲大戰亂の結果として一躍成金國、工業國となりたりと觀じつゝある間に早くも國民經濟內に於て食糧品の絕對的

不足を云々するに到りたるは正に價値の經濟の假面の一部が破れたのであつて、現實暴露の悲哀を思はしめずんばあらず。

米穀果して絕對的不足乎

吾人の經濟は吾人の生を維持せんがために營まる。而して此吾人の生命の糧たる米の價格は新穀出廻り期の今日、尙依然として昨年の端境期と大差なき數字を示してゐるのである。世人が今日かゝる異常の米價を見て本年度の端境期に於て起り得可き米價の奔騰に恐怖しつゝあるは無理ならぬ事と云はざるを得ない。然らばかゝる米高は是れ何が故ぞ。

思ふに今日に於ける米價の騰貴は需要と供給の關係に出づると論を俟たない所である。則ち供給の點から云へば第一戰爭のために外國米が自由に入らないことである。第二には時局の爲めに農民の懷具合が裕かとなつて貨幣に存する其主觀的價値が著るしく下がつてきたことである。二三年前に米を賣り急いで自ら其價を賣崩して居た農民が今日其所有米を賣惜むは此結果に外ならぬ。更に需要の點から見れば工業の發達した結果として勞働者の生活程度が上進し之がために大に米の需要を增加するに到つた。特に從來麥又は米麥混合食をしてゐた農家の靑年か工業勞働者となつて米を常食するに到つたこと。並に一般農家特に畑を耕やして麥食してゐた農家が近來暫く其生活程度を高めて米麥の混合食を取るに到りし事實は、我國民の多數が農民なる丈それ丈け著るしく米の需要を喚起するに到つたので、さてこそは今日の米價の騰貴を來たしたのである。特に本年の如きは米穀生產見込高は五千三百萬石であつて、昨年の米穀消費高六千百五十萬石に比して約八百六十萬石の不足を生ずるものと見做されてゐるのである。

これが補充には朝鮮米、臺灣米は更なり、遠く蘭貢米、西貢米東京米をも輸入するの外はないのである處が既にお膝下の臺灣自らが臺灣米の輸出を禁止し、朝鮮米も亦之を禁止するの噂が傳へられてゐるのである。これでは印度不作の今日、且つ世界的食糧不足の今日蘭貢米自由輸出の許されないのも強ち非難することが出來ない。よし輸出が許されるとして百萬石の米を輸入するには三千噸級の船舶五十隻を要すると云ふから一寸つとの事で運べるものでないのである。況んや政府が之に對して自由放任せんとするに於てをやである。かゝる事情の下に我國民は何を食して生きんとするか。蓋し問題は急を告げてゐるのである。

米價調節策

既に現存せる米穀の量が其需要に對して絶對に不足してゐるものとすれば今日如何なる手段

方法を講ずるとも之を以て漏れなく萬民の需要を充たすことは出來ないのであつて。一部に之が分配に與り得ざるものゝ生するのは論を俟たない所である。而して交易經濟組織の今日に於て此の分配に與かることの出來ないのは即ち購買力のない人々であつて、必竟米價の騰貴は此等の人々を交易場裡より驅逐し以て不足せる供給を以て需要に合致せしむる經濟的自然の作用に外ならないのである。されば代價が上るも下がるもこれ共に需要を供給に合致せしむるための經濟上に於ける微妙の作用であつて、此の代價を眞正面より左右せんとすることこそ却つて甚だしき不自然の行爲と見做さゞるを得ないのである。故にもし購買力を有するものゝみが其生を樂しみ其有せざるものが悲慘の生を送るを不公正なりとなすならばそは正しく今日の經濟組織の缺陷であつて、生活資料の如きは宜しく共同經濟の原則に基きて其生産及び分配を司るべきである。若し然らんには不足ながらも社會一般の人々に差別なく行き渡る道理である。然れどもかゝる根本的方策は今日の狀態にてはこれ一個の理想であつて直ちに之を採用することの出來ないは勿論である。否米穀專賣の如き此理想に到達すべき一部の方策すらも我國今日の實際問題として之を論ずることは困難なのである。よし今日我國の財政力に於て、又官吏の組織的能力によく之を爲し得るとするも、而も分配過程は生産過程の基礎の上に行はるゝものであつて、所謂無い袖は振られないのである。故に此方法が公正なる分配をなすとするも、其分配すべき生産物の增加を期待し得ざる以上は直ちに之を以てより賢明なる政策なりとなすことは出來ないのである。否生産の上に、より大なる効果を擧ぐることを得ざるは勿論今日の人々の知識能力にては分配方法の上に於ても尙今日の制度の如き經濟的效果を擧げ得るや否や甚だ疑はしきものがある。現に英米に於ては戰時に於ける國家の試みたる事業管理の成績を以て私人のそれに比し甚だしく不滿足不成績のものなりとし、一日も早く之を民間の手に復歸せしむるの利益を論ずるものゝ多いのを見ても之を推知することが出來るのである。

從來我國の米價は動搖常なく而も其上下動搖の距離甚だしく大にして國民の經濟生活を安定を脅かすこと極めて大であつた。從つて此動搖の距離を短縮することも亦一つの調節策たることを失はぬ。此點に於て常平倉の如きも之を考慮すべき價値のあるものであるけれども吾人は既に數量の絶對的不足を前提としたものであるかゝる此種の調節策の批評は茲に述べない。只吾人を以て見れば今後米價が極度に下るが如き

は想像し得ざる所である。蓋し一度高めたる生活程度は容易に之を下し得るものでないのみならず、民衆的勢力の强くなつてきた今日では戰後と雖も一旦上げた俸給生活者の所得を下すとも出來ないから米の需要は衰へないと思はる。

も今年の米作は決して不作ではないのである。勿論外國米は今後より多く輸入せられるであらうけれどもこれとて外國に於ける民衆的勢力甚だしく强大となりて其生活程度が高まり、且つは食糧品を充分に國内に確保することが彼等の不平を緩和し社會の秩序を保つ尤も有效なる方策たることの政治家によつて痛切に感知せられたる今日諸外國が從來に於けるが如く食糧品の自由輸出を許すや否やは甚だしく疑問と云はざるを得ない。されば勿論彈力性なき米の如きは少しの量の增減によりて直ちに大なる代價の騰落を惹起するけれども而も其程度は從前の如き甚だしきものではあるまい。少なくとも極度に下落することはないのである。

以是觀是今日の經濟組織の内に於て交易經濟の原則に干涉することなくして米價を調節し國民生活を安易ならしむる方法は米の需要を減少するか、又は其供給を增加する外途はないのである。吾輩は從來常に今日の生活資料の騰貴は一般的の需要の增加より來るものであるから之を救濟するの道は物を增加するの外はない、金融政策を弄す可きものでないことを力說してゐたのであるが、近時世人が漸やく個々の代價に注意し、物の方面を觀察するに到りたるは進步せる傾向と見做さゞるを得ないのである。而して今日世人が米價調節策として論ずるもの擧げてみると大約次の如きものがある。

消極的米價調節策の價値

則ち造酒石の制限によつて米穀の需要を減少せんとするものは其一であつて、米無日を設け又は節食して代用食物たる甘藷、馬鈴薯、麵麭、飽飩等を以てせんとするもの其二である。現に關西商業會議聯合調査會の如きは酒造石の制限のみにては尙本年の米收穫は其需要に應ずるに足らずとなし、其調節として每月六日間節食して混合食又は代用食を取るの運動を起し全國に向つて檄を飛ばしてゐる。

勿論米の代はりに麥、甘藷、馬鈴薯、蕎麥、を食すれば米の需要はそれ丈減するであらう。而して米價も下るかも知れない。然かしながら茲に注意しなければならぬのは其代用食たる麥や甘藷の供給は無限ではないのである。米に對する供給の減じたと云ふことはそれ丈此等の代用食に對する需要の增加したことを意味するのであつて從つて又代價の騰貴を覺悟しなければならぬのである。然るに今日此等の代用食が都會に於ける一般勞働者の日常食物となり得ざるは何故なりやと云ふに是れ蓋し我國に於て此等の生產額、從つて供給少なくして其價値に比し都會に於ける代價の極めて高きが故に外ならないのである。此事は歐洲諸國の下層社會が麵麭の代りに馬鈴薯代用しつゝある一事によりて容易に之を推知し得るのである。然るに今此等に對する需要增加のために其代價騰貴せんか下層社會は益々米に執着して從來此等を食し居たるものも亦米に走るに到るやも未だ知る可からざるものがある。かくては知識階級が粗食して、下級社會が米食すると云ふ奇現象を生ずるに到る。否奇現象に止まらばよし、而も社會の下層には現に米食をなすを得ずして此等の粗食に甘んせざる可からざる者がある。然るに是等の輩は代用食の需要增加のために其代價騰貴して其粗食すらもとる能はず更に一層慘憺たる地位に

陷るもの〻生ずるに注意しなければならぬのである。現に昨年の八月南豫の小都會に於ける、ある有名なる酒精會社が其地方の未だ收獲を終らざる植付の甘藷を非常の高價に買占めて一般の怒を買つたことがある。則ち世人は會社の行爲を以て彼等が米高のために米を得ず、己むなく甘藷に向はんとすれば、今や會社は之をも買占めて食糧を彼等より奪ふ無情の行爲なりと絶叫して遂に燒打を實行して一夜の中に數百萬の損害を與へたのである。此故に代用食を實際に行はんとするには大に供給を增加し而も生產費を低廉ならしむることを前提としなければならぬのである。

次に若し此の米無日又は節食運動が事實上の減食を意味するものならばそは又甚だしき奇怪の運動と云はざるを得ない。かゝる運動は國家の危急存亡の秋に於て一時的應急策として行はることは致し方なしと雖も、而も平時に於てかゝる極端なる消極政策は此の興國々民の意氣を消沈せしむるものであつて斷じて用ふ可きものでない。況んや之が爲めに勞働者の生產能率を減ずるの恐れあるに於てをやである。酒造の制限亦之と五十步百步である。アルコール問題勿論吾人の看過する處ではないけれども、物は凡て程度問題である。否酒なき社會は恐らく野分の後の枯野よりもつと殺風景なものであらう、人は器械ではない一杯の美酒が一日の勞を醫する其效果は禁酒家の知る處ではないのである。而して之を知らざるものは之を論ずる資格はないのである。

要之節食運動と云ひ酒造制限と云ひ一時的の應急策としては其效果必ずしも無視することは出來ないものもあるけれども永久策として採る可きものではない。蓋し多樣多種の慾望を多量に充足することこそこれ吾人の本性であり、目的である。而して吾人經濟の、且つは國家の經濟政策の眞の目的とする所も亦此點にあるのではないか、然るに前述の如く此慾望の充足を抑壓し、退化せしめんとするは是れ抑々人間の本性に逆ふものであり、人間社會を原始狀態に逆轉せしめんとするものあつて、斷じて永久策として採る可き所のものではないのである。

食糧問題より講和會議へ

論じて茲に到れば我國今日の社會狀態は所謂比較的人口過多の狀態にあるものである。換言すれば我國今日の社會組織、經濟組織、法律制度、技術及び國際關係の下に在りては我國の生活資料は我國民を支持するに足りないのである、かゝる狀態の下にある我國に於て、いくら工業を隆昌にして輸出を增進したればとて決して國民の幸福を增進するものでない。そは却つて益々社會的不安を增加するに過ぎないのである。此故に今日我國の社會、經濟法律技術等何等かの方面に改革を行ひ以て此の人口過多の狀態を脫することは是れ我國に於て目下焦眉の急に迫つてゐる問題なのである。而も今日の社會經濟組織を根本的に覆へすことの出來ないのは前述した通りである。其內一部の分配組織の改善、又は消費の節約も亦多く期待することの出來ないのも既述した所である。或は我國には今日尙二百萬町步の未開墾地があると云ふに一縷の望みを囑するものがあるけれども斯の如きは是れ技術的限界の前に經濟限界の在るを忘れた論である。若し此耕境を下くるとせば生產費增加して食糧品の代價騰貴を如何せんとするか、況んや一方には之と共に每年七十萬人の人口の增加するものがあるか之を以て將來食物の自給を期することは出來ないのである。

茲に於てか餘す所は只我國の對外關係の改善によりて國民生活の發展向上を計る外に徹底的の途はないのである。然るに今や五ヶ年に亘る歐洲大戰亂は已みて全世界を改造せんとする講和會議は佛都巴里に於て開かれ我國亦五大强國の一として大なる發言權を有するの地位を與へられてゐる。誠や此機會は人口過剩に苦しみ之が救濟は國際關係の改善による外途なき我國に採りては正に千載一遇の好機なのである。此機を逸せんか我國の將來は眞に憂慮に堪えぬものがある。吾輩を以て見れば此機を適當に利用して對外關係を改善し得るや否やは正に吾等六千萬同胞の幸福發展の分かるゝ處と信ずるのである。

然らば講和會議に於ける將來の世界改造に際して如何なる方針を以て臨まば我國の食糧問題は解決せらるゝかと云ふと、そは勿論我國の生活資料に對する需要を減じ、供給を增加する方策であらねばならぬ。

則ち先づ第一には我國の過剩人口が自由に他國に出づることを得て國內に於ける生活資料に對する壓迫を避くることであらねばならぬ。それには先づ米國及び濠洲が日本人に對して差別的待遇をなし其入國を禁ずる現制度の如きは第一に改めさゝなければならぬ。而してそは我國のためばかりでなく將來の平和を確保する尤も有効なる手段であるからである。

第二には豐富なる土地を擁して充分の生活資料の餘剩を有するものは之が輸出に制限を加ふることなく充分に他國に分配せしめなければならぬ。若しかゝる方法を採らさらんか土地少なき國は生活資料に窮するを以て所謂背に腹は代へられぬ道理で已むなく干戈に訴つて之を獲得せんとし茲に復もや禍亂を惹起するに到るからである。故に此方法は亦我國に必要缺く可からざるのみならず將來の世界の平和の爲めに缺く可からざる所である。

然らば食糧品の自由輸出さへ許さるれば我國は食糧品に不足を來さゞるやと云ふに然に非ず蓋し外國より米穀を輸入せんとするには必ず之が對價を仕拂はなければならぬ。之には一國の工業を盛んにし之を輸出して食糧品を得るか、又は自ら海外に出でゝ事業を起すか、或は資金を貸與しなければならぬ。然るに工業を起すには原料を必要とするから、世界に於ける原料も亦一國の獨占す可きものでなく自由に之を分配しなければならぬ。而して又外國人の企業及び資本に對して排外的政策を採つていけない。若し之に反する場合には前と同じく土地狹き國は生活資料に窮するを以て又もや干戈に訴へるに到るからである。

若し此度國際間の條約によりて此等人、物、金の三者の國際的移動が自由に行はるゝに到らば我國の如き一方には過剩人口を移出して生活資料に對する壓迫を緩和し、他方には大に國內工業及び海外企業を發展せしして外國食糧品を輸入して我國に於ける其供給を增加し得るの途開かるゝが故に茲に於て我國の糧食問題は徹底的に解決せらるゝのである。而して此事は單に我國の利益たるのみならず、將來の戰爭を防止する上に尤も有効なる方法なのである。世界の爲であると共に亦我國の爲なのである。而して其機會は今や吾人の目前に展開せられてゐるのである。吾人は刮目して我講和大使の手腕を見んとするものである。

（附記、議會開かるゝや果せる哉吾人の豫想誤たず今や食糧問題は火花を散らして盛んに論議せられてゐる。國民經濟生活の問題が

かほどまで議會の問題となつたのは始めてゞあらう。然るに政府當局及び議員諸氏の云ふ所、多くは目前の消極的調節策に囚はれて根本に到らず遠きに及ばざるは遺憾と云ふ可きである。而して講和會議を論ずれば只政治外交の問題として之を云ふ。國民の經濟的生活を離れて政治外交抑々何ぞ、政治と云ふも外交と云ふも何れも吾人の生活を幸福ならしめんとする手段ではないか。パンを離れて政治も外交もあつたものでない。吾人の見る講和會議は正に斯くの如くである。）

批評と紹介

橋本喜作著『紐育株式取引所』

大正七年十一月ダイヤモンド社發行
四六版二百六十三頁定價金一圓七十錢

今次戰爭勃發前に於ては北米合衆國は歐洲諸國に對して巨額の債務を負つて居つたのであるが、開戰後同國より多量の軍需品を聯合國側に供給せし結果として、前日の債務國は遽かに一大債權國と化し、米國が今日歐洲及び南米諸國に貸付たる金額は數百億圓に上ると云はれて居る。而して、此巨額の海外放資は紐育を中心として行はれて居るが爲め、同市が戰後に於て世界金融市場に占む可き地位は戰前に於ける英京倫敦の夫れに比す可きものあるやも測り難いのである。否な、世界金融の中心が近き將來に於て倫敦より同市に移るに至るであらうと豫言する者さへある。若し果して然らば、戰後に於ける紐育株式取引所の繁盛も逆睹し難くはない。

茲に紹介せんと欲する橋本氏の著述は此紐育株式取引所の組織に關する一般的説明を中心として、米國實業及金融事情の一斑を叙説せるものである。著者は此取引所のみならず、取引所外に於て行はるゝ株式取引市場として世界に最も有名なる紐育市のカーブ・マーケット、並に劣等株の取引市場たる同市のコンソリデーテット株式取引所に就きて、各其の發達の歴史組織、立會の方法、市場に於ける仲買人の地位、上場株の性質、仲買人の手數料等をば通俗的に略述せるが、行文流暢にして、各項の記述簡なるも要を盡して居る。殊に我國に於ける株式取引の方法に精通せる著者は米國有價證券市場の實情を描寫すると同時に、我國の習慣と對比して隨處に短評を加へたるを以て讀者の受くる印象を深くすること少くなからうと思はれる。

取引所の説明以外に、本書には紐育取引所定款の全文を譯載し米國屈指の大會社たる合衆國製鋼株式會社及びユニオン・パシフヰック鐵道會社の内情を略叙し、米國事業及び金融界の巨頭たる故ゼー・ピー・モルガン、チヤーレス・エム・シユワツブ、ゼー・ヂー・ロツクフエラー及びアンドリユー・カーネーギーの四氏の略傳を掲げて各氏の功績を明かにし、且つ卷尾に附錄として『戰時中の米國財政』なる題下に開戰後に於ける米國金融膨脹の梗概を述べて居る。

本書中紐育市の株式取引に關する記事は曾て大阪毎日新聞の紙上に載せられたものであるが、著者は之を一纏めになし、更に其他の事項を添加し一冊として上梓したのであるが、全篇の記事論述皆な有益の文字にて一般讀者の參考に資する所尠からぬものであると思ふ。

理財學會々報

理財學會例會　大正七年十一月十九日午後二時大講堂に於て開催す。阿部教授の開會の辭に次ぎ左記諸氏の講演あり。相當の聽衆を見る。

一、戰時に於ける獨逸社會黨　田中萃一郎君
一、物價と通貨　山本悌次郎君

五時頃閉會し次で萬來舍に晩餐會を開く。阿部教授を中心として歡談を交へ七時過散會す。

講演者が兩氏とも多忙の爲め參會なかりしは遺憾とする所なり。

晩餐會出席者。阿部教授、三年幹事　神戸、二年幹事　中津、古内、奥谷、青木、奥井。